

ミャンマー・スタディーツアー2017 報告書

工学系研究科社会基盤学専攻
修士1年 信夫あゆみ

1 はじめに

ミャンマーという国が、世界の注目を集めて久しい。2011年に軍事政権からの開放がはじまって以降、安価な労働力が供給できる「アジアの最後のフロンティア」と称され世界各国からの支援や投資が増加している。一方直近では、ミャンマー北西部ラカイン州における、少数民族でイスラム教徒のロヒンギャに対する軍や仏教徒による凄惨な迫害が、日々ニュースで取沙汰されている。

今回のスタディーツアーの趣旨は、そうしたミャンマーという国を農業という切り口から調査するというものであった。訪れた地域は三か所とごく一部であり、この短期間の訪問で他民族国家ミャンマーの全貌を語ることはできないが、農業大学や農村、地元の人々で賑わう市場や農業灌漑省を訪問することで、私が触れたミャンマーの一面を、報告できたらと思う。

2 スタディーツアーの概要

【日程】2017年7月13日から2017年7月22日の10日間

一日目：ヤンゴン空港到着、イエジン農業大学へ移動

二日目：イエジン農業大学見学

三日目：マンダレーへ移動、JICA事務所訪問

四日目：農村インタビュー

五日目：シャン州へ移動、イエジン農業大学シャン地方キャンパス

六日目：農業省ニャウンシュエ支部訪問、市場インタビュー

インレー湖のトマト栽培農家見学

七日目：孤児院訪問、ワイン農家見学、サトウキビ農家見学

八日目：イエジン農業大学へ移動

九日目：イエジン農業大学にて発表

十日目：ヤンゴン市内訪問、ヤンゴン空港から帰国

【参加者】

日本側：教員4名、学生16名

ミャンマー側：教員2～3名、通訳としての博士学生4名

3 イエジン農業大学訪問（二日目）

今回のスタディーツアーの全ての日程を通して、イエジン農業大学の先生方や学生の方々にお世話になった。イエジン農業大学とは、ネピドー近郊に位置するミャンマーで唯一の農業大学であり、現在では毎年 3000 人が 400 人の募集人数につめかけているとのことである。生徒は 48% が農家出身であり、卒業後男性は私企業や NPO、政府などへ、女性は政府や学校に就職することが多いとのことであった。JICA や KOICA、オーストラリア等多くの海外からの支援を受けていることも特徴である。

先生方からの学校の紹介では、ミャンマー各地に存在する大学の広大なキャンパスについて、年々増加する生徒数に対して大学のインフラが整っていないことについてのお話があった。また、ミャンマーにおける農業に関しては、増加する干ばつや洪水の被害に耐えうる品種の開発の必要性についてや、マンダレーの乾燥気候農業・シャン州の焼き畑・インレー湖の水上農業といった、ミャンマーの多様な地理・気候がもたらす多種多様な農業の在り方についての紹介があった。更に、構内のいくつかの施設を回り、広大な実習用の畑や、心もとない状態の器具が設置された実験室等がみられた。

JICA 職員の方の大学に関するお話では、生徒数に対して圧倒的に教員不足・スタッフ不足で教員の研究に充てる時間が足りていないこと、法律により多くの物資が日本から供給困難であり支援の柔軟さの点で他国の支援と差が出てしまっていること、暗記中心のミャンマー式教育から研究志向へと大学の方針が転換しつつあること、などのお話を伺うことができた。また、ミャンマーの農業全般に関しては、品質が高くても高値で売れないため品質を高めるインセンティブが起りにくいという、ミャンマーの農産物の国際競争力強化や農民の所得向上における構造的な課題のお話があった。この構造は、マンダレーで訪問した乾燥灌漑の技術協力をしている JICA 事務所の方も話しされていた。

この日以降最終日まで、このイエジン農業大学の博士課程の学生の方 4 名にミャンマー語と英語の通訳として同行していただいた。



写真：イエジン農業大学の見学の様子

4 マンダレー：農村訪問（四日目）

マンダレーにある農村を訪問する機会があった。典型的な塊村で、村の中に道らしき道はなく、柵で囲われた村の敷地内に家々が点在し、その合間が道として利用されているという表現の方が近いような構造をしていた。バスの車窓から見えたこの地域の多くの農村と同様に、ほとんどの家はトディーパームというヤシの木の葉や皮、板でできていた。家にはドア等がなく内部と外部との境界が曖昧で、歩いていると何度も家の縁側のような軒先から「ミングラーバー（こんにちは）」とにこやかに声をかけられた。



写真：村の様子

この村では三つの世帯にインタビューすることができた。どの家でも快くインタビューを引き受けてくれ、お菓子や育てたピーナッツのお土産まで持たせてくれた。インタビューを通して、自分の土地を空港用地として政府に接収され僅かに残った土地で自給用程度の農作物を育てている人の話、多くの村民は大工の職を農業と両立することで生計を立てていること（ミャンマーには兼業農家が非常に多いらしい）、ただし 60 エーカーの大地主の農家は農業のみで生計を立てていること、農機は共同で購入したものがあるがレンタル料が高いため多くの人々は牛で耕作をしていること、多くの家に通っていた電気はここ 1～2年の間に通ったものであることなどの話を聞くことができた。また、子供たちの就学状況を尋ねてみると、中学高校と順調に通っている場合や、学校に意味を見出さないからと自分で選択してドロップアウトして家の農業を手伝っている場合、家の経済的な理由から学校を途中でやめざるを得なかった場合などさまざまなケースがあることが分かった。



写真：インタビューした世帯



写真：下校中の子供たち（撮影：笹孝明）

5 シャン州：市場インタビュー、水上トマト農園訪問（六日目）

シャン州では、農作物や肉、日用品等が売られている常設市場にてインタビューをすることができた。忙しそうであったにも関わらず、快くインタビューに応じてくれた。商人は圧倒的に女性が多かった。また、一口に商人と言っても、自分が作ったものを売っている人と、農家から買い取って複数の市場で売っている人のパターンに分かれることが分かった。ある農民の女性は、五日に一回市場で販売しており一日の売り上げは10000K（チャット）であるにも関わらず、ネピドーで私立の高校に通う孫のために学費を500000K 出資していると誇らしげに語っていた。収入源が他にあるのであろう。



写真：市場の様子

インレー湖の水上トマト農園をボートで見学する機会もあった。インレー湖は360度山に囲まれており自然が美しく、トマトの赤い実が畑に彩られる季節になると、世界中の人々が観光に訪れるという。ミャンマーでトマトが収穫できる地域が限られているため、トマトは高値であり、インレー湖上に家を持つ人々は比較的裕福で陸地に家がある世帯も多いとのことであった。一方で、ボートで家へと下校中とみられる子供の姿も見られた。



写真：水上農業の様子

6 おわりに

今回紹介した事柄は、短期間の滞在で見聞きしたことのほんの一部に過ぎないが、総じて私が今回ミャンマーに抱くようになったイメージは、よそ者を人懐っこく歓迎する村や市場や通訳の人々であり、自分たちが開発した病気に強い種がミャンマー中で栽培されることになったことを誇らしげに語る農業灌漑省の研究者の方の姿であり、バスの中から目さえ合えば笑顔で手を振ってくれる子供たちであり、インレー湖や田畑の美しい自然の風景である。

昨今物騒な国としてミャンマーに対する国際的な風当たりは強い。一方で、ソーシャルメディア等においては、反ロヒンギャや世界における報道の不正確さ、アウンサンスーチー擁護をミャンマーの人々が訴える文章が多くみられた。状況は複雑さを増し一言で片づけることは到底できないが、一刻も早くミャンマーに平和が訪れることを願う。



写真：お世話になったガイドの方々と

参考文献

住友商事『「アジアのラストフロンティア」と呼ばれる国、ミャンマー」

<http://www.sumitocorp.co.jp/business/kouhou-person/article/id=27687>